

「特別英語」カリキュラム開発のための学生に対するニーズ分析 —英語習熟度と選好性との関係—

平 野 亜 也 子

要 旨

本学の外国語学部が展開している「特別英語」プログラムについて、現状の把握と今後のカリキュラム開発に反映させることを目的とし、1,019名の学生を対象としたニーズ調査を実施した。学生の英語習熟度と科目への選好性との関係を調査するために、全回答者は英語習熟度に応じて3つのレベルに分けられた。主な回答者は外国語学部生であった。調査の結果、習熟度が高い学生はコンテンツ科目を希望しているが、初・中級レベルの学生はスキル科目を希望していることがわかった。また、スキル科目の中では習熟度に関係なくスピーキングが一番人気があるが、2番目に受講したいスキル科目として、習熟度の高い学生が選んだのはライティングであったのに対し、初・中級レベルの学生はリスニングを選んでいった。さらに、コンテンツ科目の中では、習熟度が高い学生は国際関係関連やビジネス関連などグローバル人材に必要とされる内容を好む傾向があるのに対し、初・中級レベルの学生は映画やコミックなど、楽しく英語が学べる科目を好む傾向がみられた。これらの結果を踏まえて、今後のカリキュラムの調整と改善策を議論する。

キーワード：English for General Purposes (EGP), English for Academic Purposes (EAP),
英語カリキュラム開発, ニーズ分析, 英語教育

1. はじめに

グローバル化が進む中、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要であり(文部科学省, 2014)、効果的な英語コミュニケーションを行うための英語運用能力の育成が喫緊の課題となっている。また、大学でグローバル人材に必要とされる英語運用能力を育成するためには、各個人の英語学習の時間をできるだけ多く担保することが重要である。一方で、中・高校時代とは異なり受験という目的がなくなる大学生の英語学習への動機を高めるためには、各個人のニーズに合わせたカリキュラムを設定することが必要である。これまでの研究から、実際に学生が興味を示す科目と、教員が学生の興味を予想して提供する科目との間にズレが生じることも示されている(Busch, Elsea, Gruba, & Johnson, 1994)。このズレを少しでも解消するためには、学習者を対象としたニーズ分析が不可欠である(West, 1994)。

ニーズ分析とは、学習者が将来どのような目的や状況で外国語を使うようになるのかを予測し、それをもとにどのような言語能力を伸ばす必要があるのかを分析すること(2012, 寺内編)であり、堀口(2003)によると、近年は日本の多くの大学でEnglish for Specific Purposes (ESP)を意識したカリキュラムが策定されている。ESP研究とは、寺内(2000)によると「学

問的背景や職業などの固有ニーズを持つことにより区別され同質性が認められ、その専門領域において職業上の目的を達成するために形成される集団である『ディスコース・コミュニティ』の内外において、明確かつ具体的な目的を持って英語を使用するための英語研究、およびその英語教育」である。また、ディスコース・コミュニティについて、寺内編（2012）は「コミュニティ内の人々は発信したり受信したりするディスコースを通じて結び付けられていて、物理的に接近しているからではなく、共通の概念や目標に基づいて集団が形成されている」と説明している。さらに、寺内（2000）はESPの基本的な特徴は、「学習者のニーズの分析に基づいていること、ジャンル（学問的背景や職業などの同質性）が認められること」だと指摘している。すなわち、ESPは「特定目的のための英語（に関する研究および実践）」あるいは、「専門英語教育（あるいは研究）」と捉えられている（加茂・藤原，2013）。

ESP教育を導入するためには、ニーズ分析が不可欠であると指摘されている（e.g., 深山，2007）。そして深山（2007）は、ESPのニーズ分析を「学習者が将来どのような目的や状況で外国語を使うのかを予測し、それを基にどのような言語能力を伸ばす必要があるのかを分析すること。外国語を学習するにあたってどのようなことを達成したいのかを調査し、そのためにふさわしい教材、タスク、評価方法などを考慮すること」と定義している。これまで実施されてきたESPニーズ分析には、幼児教育を専攻する学生を対象としたもの（大須賀，2006）、保育・心理を専攻する学生を対象としたもの（松崎，2008；加茂・藤原，2013）、医療を専攻する学生を対象としたもの（高木，2008；杉山，2010，他）、工学を専攻する学生を対象としたもの（吉田，2005 他）などがある。

一方、言語を専攻する学生の場合は、言語そのものが専門領域であるため、ESPのような「専門領域内でのディスコース・コミュニティ集団」は形成されにくい。したがって、言語を専攻する大学生を対象とする場合はESPではなく、学術的な場で用いられる英語であるEnglish for Academic Purposes (EAP) と、主に個人的で一般的な目的で用いられる英語であるEnglish for General Purposes (EGP) とをバランス良く取り入れたカリキュラムの策定が求められる。そして、これらの学生の英語学習を促進するためには、ESPと同様にEAPおよびEGP教育においてもニーズ分析は重要だと考えられる。

我が国におけるEGPおよびEAPのニーズ分析としては、Widdows & Voller (1991) がPANSI (Profile of Attitudes, Needs and Students Interests) を開発し、大学生86名を対象に『大学生の要望、態度や関心事の概要研究アンケート』を実施した。119項目からなるこの調査では、「現在学習している英語や到達目標」について学生に尋ねており、Widdows & Voller (1991) はその結果をもとに「学生が望んでいることと、実際に指導されていることの間には、ギャップがある」と報告している。また、Busch et al. (1994) は神田外語大学におけるカリキュラム編成のために、PANSIをもとにしたアンケート調査を教員や学生を対象に実施した。そしてその結果にもとづき、教員と学生との間でニーズに対する認識に相違があることが明確

になった、と述べている。古家・櫻井(2014)はEGPにおけるニーズ分析を実施したが、対象者の専門分野は多岐にわたっており、言語を専攻する学生を対象としたものではなかった。このように、言語を専攻する学生を対象としたニーズ分析は、筆者の知る限りこれまでほとんど行われていない。そこで本研究では、主に言語を専攻分野とする1,019名の大学生を対象にニーズ調査を実施し、彼らがどのような科目を受講したいと考えているのかを明らかにする。そして、その結果を踏まえて、カリキュラム策定に向けた提言をすることを目的とする。

2. 「特別英語」プログラム

本調査は、本学で提供されている「特別英語」プログラムのクラス内で実施した。外国語学部が提供している本プログラムは全学部生が履修することができるが、履修形態が外国語学部生と他学部生とは異なる。外国語学部生にとって「特別英語」は必修選択科目であり、2018年以前の入学生は10単位、2019年度以降入学生は4単位が卒業要件となっている。一方、他学部生にとっては「特別英語」は卒業要件に入っていない。そのため、「特別英語」履修生の95%は外国語学部生である。

「特別英語」はMoodleコースとSetコースと呼ばれる2種類のコースで構成されている。このうちMoodleコースは、学生が履修希望科目にMoodleと呼ばれる学習管理システムを通じて抽選応募し、その後実施される抽選で当選すると受講できるシステムとなっている。一方Setコースは外国語学部生のためのシステムで、あらかじめ決められた科目が自動で履修登録されている。そのため、「特別英語」のSetコース科目の履修にあたっては、学生は抽選に応募する必要はない。このSetコースが設定されたのは、「特別英語」の単位取得が卒業要件となっている外国語学部生に対して、抽選に外れても履修できる科目を確約する必要があったためである。

「特別英語」Moodleコースの授業には、英語習熟度レベルが設定されている科目と全レベルの学生が履修できる科目がある。「特別英語」では、学生の習熟度別に3つのレベル①ブロンズ(初級)、②ゴールド(中級)、③プラチナ(上級)を設定しており、ゴールド(中級)やプラチナ(上級)に認定されるためには、IELTS™スコア、TOEFL® iBTスコアを提出する、または「特別英語」独自のレベル分けテスト(ライティングテストおよびスピーキングテスト)を受験して合格する必要がある。目安となる検定スコアは、ゴールドがIELTS™ 4.5~5.0またはTOEFL® iBT 39~54、プラチナがIELTS™ 5.5以上またはTOEFL® iBT 54以上である。

「特別英語」の各レベルの目安として採用しているIELTS™はBANDスコアという方法で評価され、1.0~9.0で0.5刻みのバンドが用意されている。「特別英語」ゴールドレベルである5.0の英語能力は、IELTS™によると「部分的に英語を駆使する能力を有しており、大概の状況において全体的な意味をつかむことができる。ただし、多くの間違いを犯すことも予想される。

自身の分野においては、基本的なコミュニケーションを行うことができる」とされている。また、「特別英語」プラチナレベルより少し高い6.0の英語能力は「不正確さ、不適切さ、および誤解がいくらかみられるものの、概して効果的に英語を駆使する能力を有している。特に、慣れた状況においては、かなり複雑な言語を使いこなすことができる」とされている。

上記のIELTS™スコアやTOEFL® iBTスコアを有していない学生は、認定を受けるために「特別英語」独自のレベル分けテストを受験しなければならない。このテストは、IELTS™の形式に倣って作成したものである。例えばスピーキングテストは、Attitude（積極的な態度）、Fluency（流暢さ）、Grammar（文法の正確さ）、Vocabulary（語彙レベル）の4つの評価項目からなり、各項目はProactive（5点）、Active（4点）、Reactive（3点）、Passive（2点）、Uncommunicative（1点）、で評価され、20点満点のテストとなっている。学生はこのスピーキングテストを受験し、スコアが12点～16点であればゴールドレベル、16点以上ならプラチナレベル認定、となる。なお、ブロンズ（初級）レベルとは、レベル分けテストに不合格またはレベル分けテストを受験していない学生である。Setクラスの「特別英語」を受講している外国語学部生のほとんどはブロンズレベルである。

調査を実施した2019年度は、「特別英語」には80科目あり、206クラスが開講されていた。コースは多岐にわたり、スピーキング、リスニング、リーディング、ライティングといったスキルを伸ばすクラス、留学関連クラス、IELTS™やTOEFL® iBTなどの試験対策クラス、さらに文化、Gender Studies、Area Studiesなどのコンテンツ科目が展開されていた。本研究を実施する前年度までは、ネイティブ教員がこのプログラムを担当・運営していたため、本調査における調査項目である「学生が興味を持つだろうと考えるコンテンツ科目」は、ネイティブ教員が考えた。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、言語を専攻分野とする大学生がどのような選択英語授業を受講したいと考えているのか、および習熟度によりその選好性が異なるのかどうかを明らかにすること、およびその結果を踏まえたより良いカリキュラム策定のための提言をすることである。そこで、以下の4つを研究課題として設定した。

研究課題1：「特別英語」全般に対する履修意欲には、習熟度の影響があるのか？

研究課題2：スキル科目・コンテンツ科目・試験対策科目・留学準備科目に対する履修意欲には、習熟度の影響があるのか？

研究課題3：スピーキング・リスニング・ライティング・リーディングといったスキル科目の中で、学生はどのスキル育成を目的としたクラスを受講したいと考えている

のか？また、その選好性には、習熟度の影響があるのか？

研究課題4：学生が興味を持つだろうと英語ネイティブ教員が考えたコンテンツ科目に対し、学生はどの程度興味を示すのか？またその選好性には、習熟度の影響があるのか？

4. 調査方法

(1) 調査対象

回答者は、本学の「特別英語」クラスを履修している大学1～4年生1,019名であった。習熟度レベルに応じて回答者を3群 ①下位群－「特別英語」ブロンズレベル、②中位群－「特別英語」ゴールドレベル (IELTS 4.5～5.0, TOEFL iBT 39～54), ③上位群－「特別英語」プラチナレベル (IELTS 5.5, TOEFL iBT 54以上) に分けたところ、その内訳は、下位群が836名、中位群が145名、上位群が38名であった。

(2) 調査項目の作成

「特別英語」プログラム担当の専任教員と英語契約講師が調査項目を作成した。まず回答者の属性に関する項目 (学年、「特別英語」レベル) についてたずね、続けてA, B, C, Dの4つのセクションを設定した (Appendix 1 参照)。

セクションAでは、選択英語科目に対する履修意欲に加えて、スキル科目・コンテンツ科目・試験対策科目および留学関連科目に対する履修意欲を、4段階 (4: はい・3: どちらかと言えばはい・2: どちらかと言えばいいえ・1: いいえ) でたずねた。セクションBでは、4スキル (スピーキング・リスニング・ライティング・リーディング) 科目の中で最も履修したい科目をたずねた。セクションCでは、英語ネイティブ教員が「学生が興味を持つだろう」と考えた14のコンテンツ科目を提示し、その中から履修したい科目を3つ選んだのち1番から3番までランキングをつけて答えるように指示した。セクションDでは、セクションCで提示した科目以外で履修したいと思う科目とその理由について自由に書くように指示した。

(3) 調査実施手順

本調査は、2019年6月上旬に「特別英語」クラスの授業内で質問紙を用いて実施した。各クラスの担当教員の協力を得て実施し、学生には無記名形式で答えてもらった。各学生は、一度のみ回答した。所要時間は10分程度であった。

(4) 調査実施後の処理と分析

質問紙を回収後、「特別英語」プログラム担当の専任教員と英語契約講師が、Microsoft Excel

を用いてデータを集計処理した。記入が不完全な、または記入が不正確な回答は除外された。その結果、有効回答者数は計 988 名で、下位群が 815 名、中位群が 138 名、上位群が 35 名であった。全回答者数に対する各群の割合は、82%、14%、4%であった（図 1 参照）。

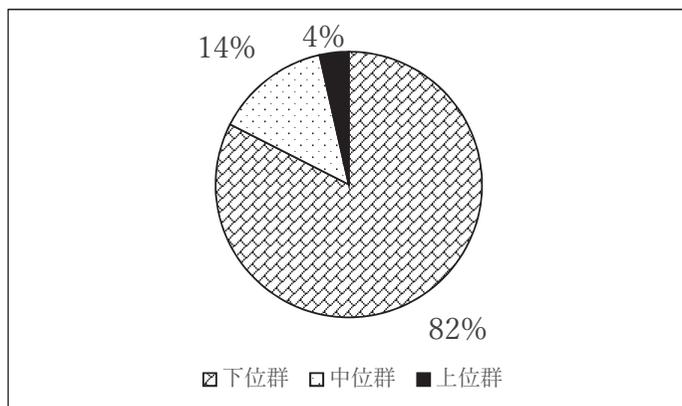


図 1：習熟度別有効回答者数の割合

分析については、セクション A は各項目の平均値（1～4）を習熟度別に比較した。セクション B は、学生が「最も履修したい」と選んだスキル科目を 1 点として合計し、各スキル科目の全体に対する割合を習熟度別に計算して比較した。セクション C は、1 位にランクされたコンテンツ科目は 3 点、2 位は 2 点、3 位は 1 点として計算し、各科目の全体に対する割合を計算し、習熟度別に比較した。セクション D は、記述内容を質的に分析した。

5. 結果と考察

(1) 研究課題 1：「特別英語」全般に対する履修意欲には、習熟度の影響があるのか？

研究課題 2：スキル科目・コンテンツ科目・試験対策科目・留学準備科目に対する履修意欲には、習熟度の影響があるのか？

セクション A の「特別英語」全般および分野別科目に対する履修意欲および習熟度の影響の結果を平均値で示す（図 2）。まず、「特別英語」全般に対する履修意欲は下位群、中位群、上位群でそれぞれ 2.3, 2.7, 3.3 であり、上位群が最も履修意欲が高いことがわかった。

次に、分野別科目に対する履修意欲は、下位群および中位群はスキル科目がそれぞれ 2.9, 3.3 と最も人気が高かったが、上位群はコンテンツ科目に対する意欲が最も高く、3.3 であった。一方、検定対策科目および留学準備科目の結果は、それぞれ下位群が 2.7, 2.5, 中位群が 2.6, 2.5, 上位群が 2.5, 2.5 であり、全ての群で履修意欲は低く、習熟度の影響も見られなかった。つまり、コンテンツ科目への履修意欲には、習熟度の影響があり、習熟度が高い学生

のはコンテンツ科目への選好性が高い一方で、習熟度が中程度以下の学生はスキル科目への履修意欲が高いこと、また、試験対策科目および留学準備科目は人気がなく習熟度の影響はみられないことがわかった。

この結果から、習熟度が高い学生は、使える英語を身につけているという自信があるため、英語をツールとして知識を増やす授業を履修したいと考えていることが示唆される。一方で、習熟度が中程度以下の学生は、自身の英語運用能力にはまだ自信がないため、スキル向上を目指す科目を履修したいのではないかと考えられる。

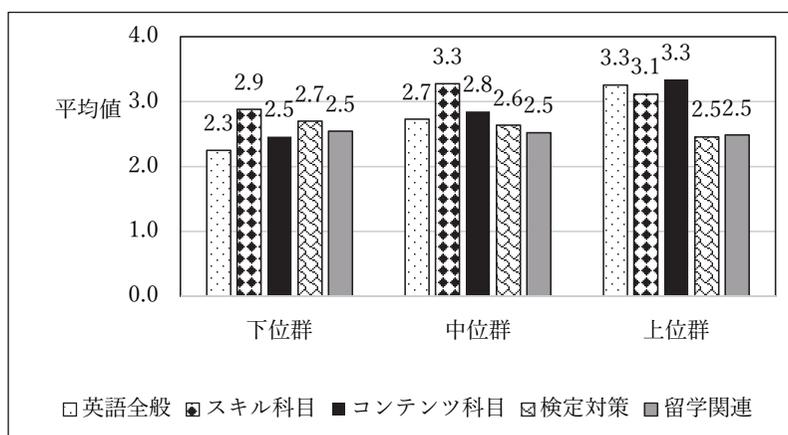


図2：習熟度別の「特別英語」全般および分野別科目に対する履修意欲

(2) 研究課題3：スピーキング・リスニング・ライティング・リーディングといったスキル科目の中で、学生はどのスキル育成を目的としたクラスを受講したいと考えているのか？また、その選好性には、習熟度の影響があるのか？

セクションBの結果を習熟度別に割合で示す(図3)。習熟度にかかわらずスピーキング科目の人気が最も高く、下位群、中位群、上位群でそれぞれ66%、72%、74%であった。一方習熟度の影響が見られたのは、ライティングとリスニングであった。ライティングは下位群、中位群、上位群でそれぞれ7%、9%、23%であり、上位群はライティング科目がスピーキング科目に次いで二番目に人気が高かったのに対し、下位群はリーディングと並んで最も人気が高かった。また、リスニングは下位群および中位群はそれぞれ20%、15%とスピーキングに次いで二番目に人気が高かったのに対し、上位群は3%であり、最も人気が高かった。

この結果から、習熟度が高い学生は英語受容能力にはすでに自信があるため、英語発信力であるライティングスキルを高めたいと考えていることが示唆される。一方で、習熟度が中程度以下の学生は、英語を聞き取るスキルに自信がないため、リスニングスキルを高めたいと考えていることが示唆される。

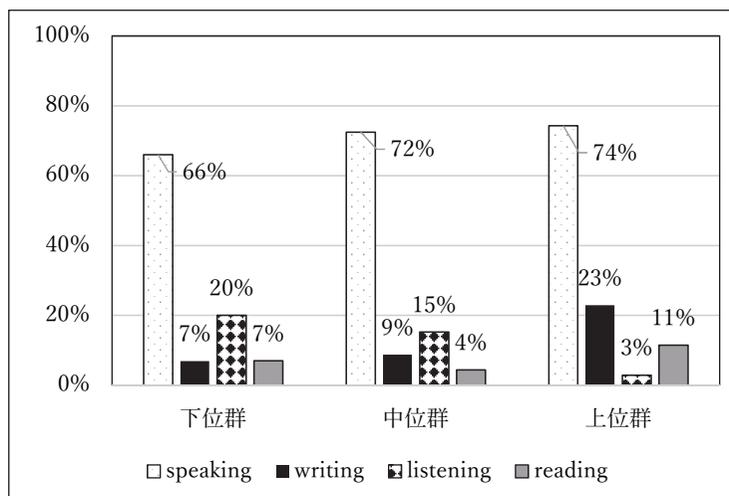


図3：習熟度別の4つのスキル科目に対する選好性

(3) 研究課題4：学生が興味を持つだろうと英語ネイティブ教員が考えたコンテンツ科目に対し、学生はどの程度興味を示すのか？またその選好性には、習熟度の影響があるのか？

セクションCの結果を、14のコンテンツ科目ごとに習熟度内で割合を比較した(図4)。下位群および中位群に一番人気があったのは“コミックと映画”で、それぞれ22%、21%であり、次いで“流行”がそれぞれ20%、20%であった。一方、上位群に一番人気が高かったのは“国際関係関連”で15%、次いで“流行”が14%であった。興味深いことに、“ビジネス関連”は上位群では13%と3番目に人気が高かったのに対し、中位群、下位群では5%、3%と人気が低かった。さらに、上位群に一番人気があった“国際関係関連”は中位群、下位群では7%、6%であり、こちらも人気は高くなかった。つまり、学生が興味を持つだろうと英語ネイティブ教員が考えるコンテンツ科目に対し、特定の科目には興味を示すが、その選好性には習熟度の影響があることがわかった。

この結果から、初級・中級者は、自分の興味に合った科目を受講し、楽しみながら英語を学びたいと考えていることが示唆される。一方、上級者は、将来必要な英語を自ら推測して、その内容に合わせた科目を受講しようと考えているのではないかと考えられる。これは、「学習者が将来どのような目的で英語を使うのかを予測し、それをもとにどのような言語能力を育成する必要があるのか」(小池他, 2003)を学習者自身が認識しているからかもしれない。

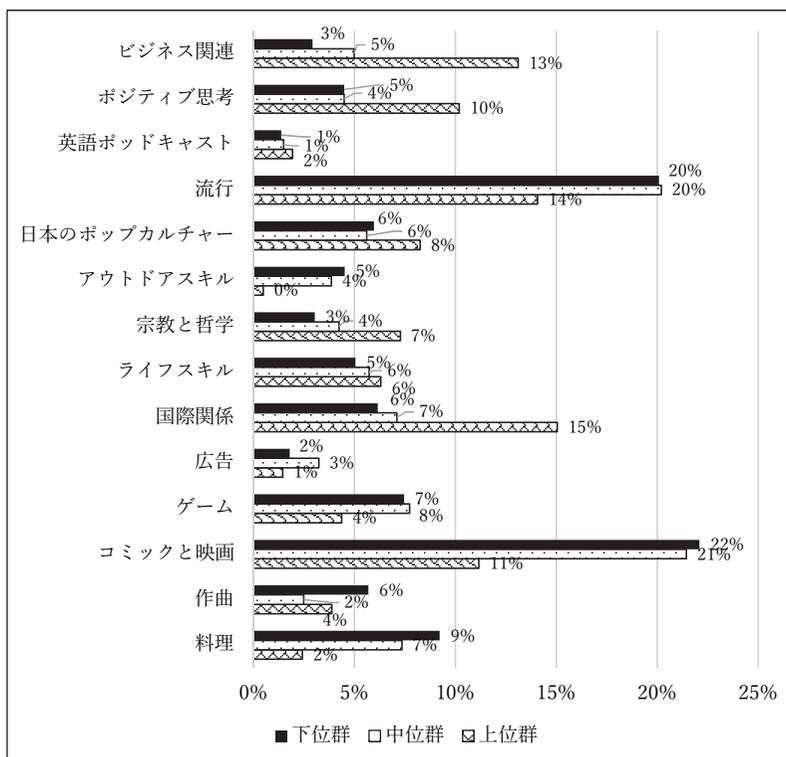


図4：14のコンテンツ科目に対する嗜好性

(4) 履修したい英語選択科目とその理由

研究課題には設定しなかったが、学生が履修したいと考える英語選択科目とその理由をセクションDで尋ねたため、その結果を記す。セクションDで記載された自由記述で一番多かった科目は、「日常会話」であった。その理由は「アルバイト先のレストランで使いたい」、「外国人の友達と話したい」であった。また、学生は「スラング」や「hospitality English」にも興味を示していることがわかった。その理由としてあげていたのは「映画やドラマの会話を理解したい」や「就職した後に使える英語を身につけたい」であった。このことから、「すぐに使える英語」への需要が高いことが示唆された。

6. まとめと提言

本研究では、主に言語を専攻分野とする大学生は、どのような英語選択科目を履修したいと考えているのかを調査するために、4つの研究課題を設定した。それらは、1)「特別英語」全般に対する履修意欲には、習熟度の影響があるのか？、2)スキル科目・コンテンツ科目・試験

対策科目・留学準備科目に対する履修意欲には、習熟度の影響があるのか？、3)スピーキング・リスニング・ライティング・リーディングといったスキル科目の中で、学生はどのスキル育成を目的としたクラスを受講したいと考えているのか？また、その選好性には、習熟度の影響があるのか？、4)学生が興味を持つだろうと英語ネイティブ教員が考えたコンテンツ科目に対し、学生はどの程度興味を示すのか？またその選好性には、習熟度の影響があるのか？であった。また、履修希望科目と習熟度との関係も確認した。

その結果、1)英語習熟度が英語科目全般に対する履修意欲に影響を及ぼすこと、2)習熟度が高い学生はコンテンツ科目を履修したいと考えているが、初・中級レベルの学生はスキル科目を履修したいと考えていること、3)習熟度に関係なくスピーキング科目が一番人気があること、習熟度が上がるとスピーキングやライティングといった産出スキル科目を受講したいと考えること、4)コンテンツ科目の中では、習熟度が高い学生は“ビジネス関連”や“国際関係関連”をテーマにした科目を履修したいと考えているが、初・中級レベルの学生は“映画”や“流行”をテーマにした科目を履修したいと考えていること、がわかった。

今回の質問紙には、上記の結果の理由を解明する質問項目を入れていないため推測の域を出ないが、習熟度が上がると英語受容能力に対する自信が生まれているため、受容能力よりも習得に時間がかかる英語産出能力を高めたいと考えるのかもしれない。IELTSTMスコアに基づく上級レベルの英語能力は「不正確さ、不適切さ、および誤解がいくらかみられるものの概して効果的に英語を駆使する能力を有している。特に、慣れた状況においては、かなり複雑な言語を使いこなすことができる」であったことから、そのように推察される。また、習熟度が上がると、将来必要となりそうなトピックを学習者自らが認識し、その意欲が履修希望科目に反映されるのかもしれない。一方、初・中級レベルの学生は楽しく英語を学びたいため、そのような意識が履修希望科目に反映されると示唆される。

本研究結果から、問題点として上位群（プラチナ）の受講者数が極めて少ないことが浮かび上がった。今後は、同レベルのクラス数を調整することおよび同レベルの受講者数を増やすための方策を考える必要がある。また、初・中級レベル（ブロンズ・ゴールド）の学生に対しては、将来的に英語が必要となる場を想定させたり、社会的なニーズに応えるという認識を持たせたりするようなアプローチが必要だとわかった。

本研究結果が、学生のニーズに合致した特別英語カリキュラム策定の一助になることを願う。

謝辞

本研究のデータ収集に協力していただいた担当教員と大学生および京都産業大学のギリス・アマンド先生、クラフリン・マシュー先生、ノートン・フィリップ先生、イベル・デレク先生、黒瀬亮先生、グローテ・キャロライン先生、に心より感謝いたします。本研究は科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号17K02908）の助成を受けて実施しました。また、本論文に貴重なご指摘をいただいた査読者の先生方に感謝申し上げます。

注

本論文は、2019年8月17日（土）の全国英語教育学会第45回弘前研究大会（弘前大学）において口頭発表したものに加筆修正を施したものである。

引用文献

- 大須賀直子（2006）。「保育者養成学校における ESP アプローチの実践とその効果の検証」『秋草学園短期大学紀要』23, 1-14.
- 加茂葉子・藤原愛（2013）。「保育士養成課程の学生に対する英語学習に関する追跡調査：ESP アプローチの視点から」『育英短期大学研究紀要』30, 81-92.
- カレイラ松崎順子（2008）。「ESP を取り入れた英語カリキュラム開発のための学生に対するニーズ調査—保育選好と心理選好の類似点および相違点—」『東京未来大学紀要』1, 77-87.
- 小池生夫（編）（2003）.『応用言語学事典』. 研究社.
- 杉山明枝（2010）。「医学英語に対する理学・作業療法士学生のニーズ」『Journal of Medical English Education』9-1, 39-47.
- 高木久代（2008）。「医療系大学における英語教育」『鈴鹿医療科学大学紀要』18, 41-51.
- 寺内一（2000）。「ESP とは何か」『ESP の理論と実践：これで日本の英語教育が変わる』. 三修社.
- 寺内一（編）.『21世紀のESP—新しいESP理論の構築と実践』. 大修館書店.
- 深山晶子（2007）。「ジャンル分析に基づいたESPアプローチの実践」『時事英語学研究』47, 1-15.
- 古家聡・櫻井千佳子（2014）。「英語に関する大学生の意識調査と英語コミュニケーション能力育成についての一考察」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』4, 29-50.
- 堀口和久（2003）. ESP と経済英語・ビジネス英語—大学英語教育の観点から—帝京大学文学部紀要教育学, 28, 145-164.
- 文部科学省（2014）.『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm
- 吉田宏予（2005）。「東洋大学工学部英語教育の試み—学習者のニーズに合った言語教育を目指して—」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』3, 3-11.
- Busch, M., Elsea, M., Gruba, P., & Johnson, F. (1992). A study of the needs, preferences and attitudes concerning the learning and teaching English proficiency as expressed by students and teachers at Kanda University. *The Journal of Kanda University of International Studies*, 6, 174-235.
- West, R. (1994). Needs analysis in language teaching. *Language teaching*, 27, 1-19.
- Widdows, S., & Voller, P. (1991). PANSI: A survey of the ELT needs of Japanese university students. *Cross Currents*, 18, 127-141.

Appendix 1

学年 / 来年以降の特別英語の必要単位数 単位 / レベル 初級 中級 上級

来年度の特別英語・開講科目についての希望調査 (別クラスで回答済みの場合、回答は不要です)

皆さんのご要望に合った科目を提供したいと考えています。ご協力、どうぞよろしく願います。

A: 以下の質問に対して、当てはまる回答を、数字(4~1)に○をして答えてください。

	はい	どちらかといえ ば、はい	どちらかといえ ば、いいえ	いいえ
1 特別英語の履修必要単位を取った後も、特別英語を履修するつもりだ	4	3	2	1
2 英語スキル科目(ライティング、スピーキング など)を履修したい	4	3	2	1
3 英語で学ぶコンテンツ科目(シエンターズタデイ、アジア・スタディーズなど)を履修したい	4	3	2	1
4 TOEFL iBT(検定試験)・IELTS(検定試験)科目を履修したい	4	3	2	1
5 留学準備のための英語科目を履修したい	4	3	2	1

B: 4つの英語スキル科目(スピーキング、リスニング、ライティング、リーディング)の中から、一番履修したいものを1つ選んで書いてください。

C: 以下の英語コンテンツ科目の中で、興味のあるものがあれば3つ選び(1つでも可)、順にランキング(1から3)をつけて、記号で回答してください。

- a. 料理 b. 作曲 c. コミック(Marvel など)と映画 d. ゲーム e. 広告 f. 国際関係関連
- g. ライフスキル(栄養、睡眠、健康) h. 宗教と哲学 i. アウトドアスキル j. 日本のポップカルチャー
- k. 旅行、トレンド(健康、食べ物、ファッション) l. 英語放送のポッドキャスト m. ポジティブ思考 n. ビジネス関連

1 番目に興味がある _____ / 2 番目に興味がある _____ / 3 番目に興味がある _____

D: 特別英語で学びたい科目内容と、その理由を書いてください。(複数OK)【例: 英語で学ぶコミック、コミックやアニメについて英語で話せるようになりたい】

Needs Analysis of Students for the Purpose of Developing the Tokubetsu Eigo Curriculum:

The Relationship Between Students' Preference and their English Proficiency

Ayako HIRANO

Abstract

The purpose of this study is to examine the needs of 1,019 EFL students who are taking Tokubetsu Eigo classes and to reflect the results that make the Tokubetsu Eigo curriculum more attractive. This study also investigated the relationship between students' preference and their English proficiency by dividing the participants into three groups based on their English proficiency: advanced, intermediate, and elementary levels. The majority of respondents were students in the Faculty of Foreign Studies. The results indicate while advanced-level students prefer Content and Language Integrated Learning (CLIL), intermediate and elementary-level students prefer English skill subjects (speaking/writing/reading/listening). Of these skill subjects, speaking class is the most popular regardless of English proficiency. However, while the advanced-level students choose writing skill as their second preference, the intermediate and elementary-level students choose listening skill as their second preference. Additionally, the advanced-level students show a strong interest in the subjects of "international relationship" and "business," possibly reflecting their perceptions about their own future needs. On the other hand, the intermediate and elementary-level students show a high interest in the subject of "movie and comic," probably reflecting their preference for learning English for enjoyment. At the end, some suggestions are made for the future direction of the Tokubetsu Eigo.

Keywords: English for General Purposes (EGP), English for Academic Purposes (EAP), English curriculum development, needs analysis, English education

